
勇者ファー。

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者ファー。

【ZPDF】

N7807K

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

勇者ファーは魔法使いミーを伴って魔王に挑むことになった。

(前書き)

『恋樂に書きました。』

「勇者様〜！」

即座に振り向くファー。

これだけ込み入った人ばかりの中で、ファーは躊躇泣くその声に振り向いた。

はつきり言つて自信過剰……いつもの事だけじ。

「どうした？」

禿頭の年嵩の男性がファーと話しあじめた。

真剣な眼差しで男の一句一句を丁寧に拾うかのように領きを繰り返している。

金色の短く切り揃えられた髪が、さわさわと風に揺れてい。私はその間、街道沿いにある石の出っ張りに腰を下ろした。足元に大きな布地の袋を投げ捨てた。

半端じやなく重かつた。女に荷物を運ばせる非情なファー。おかげで私の腕は少し太くなってきた。

右手に木の杖を持つてているけど、そろそろ大剣でも持てそうな勢いだ。

「ミー爺さんが100万バル出すからこの荷物運んでだつてよ

「100万バル！？」

ありえない……

こんな小包を運ぶのに100万バルつて。

そ、それに、そんなのなぜ勇者様に、いえ、ファーに頼むんだろ。あ、怪しい、きな臭い。

「そのおじいさんは？」

「どつか消えた、金だけはもらつたがな、ハハハ」

この馬鹿……やらかしましたよ……

「まあ、どつかに捨てちゃえば……いいか」

「そういうわけにもいかないんだ、報酬渡すかわりに竜王の剣を担

保に渡しちゃった。仕事こなさないと返してくれないって

竜、竜王の剣って、ファーの商売道具じゃない！？

しかもあれば、物凄く苦労して化け物の巣から持ち帰った、時価

数千万バルは……

と、そこで私の思考は途切れた。

真白になつた頭でバルの握つている小包をナイフで開けた。

木彫りの蛙ちゃん、あらかわいい……じゃないって！

「ど、どひするのよ！ これからどひやって商売請け負うのよ！

傭兵渡世でなんとか生きてきた私たち

もうだめかもしねない。

あの剣がなくつて、どうやって凶悪な魔物を倒せば。

「なーに、この宿屋のオヤジからもらつた銅の剣でなんとか！

無邪気に笑うファーを見てたら毒気が抜けていつた。

全く危機感のない屈託ない笑顔は不思議と私に安らぎを感じてくれる。

まあ、いいか……苦労するのは本人だし。

私は溜息を一つついて、勝手に先に歩き出したファーを追つた。

「おっちゃん、なんかいい仕事ない？」

今、このソラの街にあるハンター・ギルドに仕事を求めてやつてきた。

「ああ、あるよ、魔王と一騎打ちなんてどうだい？」

「おつ……」

「ちょっとまつたー」

その先をファーに語りせるまでに、彼の肩を引っつかんで後ろに引き寄せた。

「じょ、冗談言わないで！ 竜王の剣がないばかりか、相手は魔王よ！ 勝てるわけないでしょ！」

私は力説した。たぶん、一生分くらいの全身全霊をこめて彼を説

き伏せようとした。

しかし

「大丈夫さ……お前もいるし……なんとかなる」

ファーの瞳はいつになく頼もしい輝きを宿していた。
吸い込まれるように私は彼の瞳に見入つたまま、思わず無言で頷いてしまう。

は！？ しまった……

「おっちゃん、それ任せてくれ、俺が退治してやんよ
「そうか……分かった……」

おっちゃんが哀れな人を見る目をしていた。

そう、死にゆくファーを暖かく見送る目つきだ。

「やつと着いたな」

「ぜえぜえ……」

こんな大事な仕事でさえ、私にこの荷物を持たせてあなたは軽装備……

ファーは爽やかな顔で汗一つかいていない。

私は額の汗を白い布地を何度も押し当て拭つた。
何でこんな奴に私は着いていくんだろう。

そんな気持ちが頭の隅をよぎるが、すぐに答えが返つて来て納得させられる。

こんな奴でも好きなんですね……

「じゃあ、行こうか！」

手を差し伸べられたので、試しに重い袋を渡そうとする交わされた。

よく見てる……

素直に手を置くと、力強い腕が私を目の前の黒い塔の扉の中へ引つ張り込んだ。

「さあ、ここだー」

「うん……」

赤い仰々しい扉を開け放つと、中へ転がるように入り込んだ。ファーはまさに前転を繰り返し入っていく。

魔王らしき人が可笑しな人を見る目つきをしていた。私は恥ずかしさで少しだけ彼と距離を置いた。

「何者だ！？」

「お前に名乗る名などない！」

ファーは言いはなつと同時に、私の手に持つ袋を引つた。一瞬かくんと、動きが緩慢になつたけど、再度加速して一気に魔王に詰め寄つた。

「くらえ！」

大きな黒尽くめの魔王に、袋から何かを投げつけた。

「これは？」

透明の球が魔王の目の前ではじけたかと思うと、液体の飛沫が魔王の顔にかけられた。

「目があああ

「なにしたの？」

大きな体を苦しそうに折りたたみ、魔王は悲鳴を上げていた。

「塩酸だよ……ヒヒヒ」

魔王は手を振り回していたが、もう何も見えないようだつた。私はファーの非道ぶりに青褪めて立ち止まつていた。

「馬鹿！ 魔法だ！」

視力が失われた魔王を剣で突きまくるファー。

甲高い金属音がこだまするが、ファーの攻撃はきいてなさそう。私は呪文を唱え、火の球を何度も何度も魔王にぶつけた。格闘すること3時間、やつと魔王は地に伏せた。

「勝つたー！」

私たちは手を取り合つて、その場で踊るように回つていた。

と 部屋の奥から大きな足音が。

「どうした、部下A」

「 「 」 」

「 そろそろ足音が聞こえると、私たちは塔を駆け下りていった。
こうして、初めての魔王城ツアーは無事に？ 終わった。 」

(後書き)

オチがいまいち浮びませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7807k/>

勇者ファー。

2010年10月8日15時22分発行